2026/4/26

# 資料室だより　１６９

Recent Researches in the Music of the Middle Ages and Early Renaissance のシリーズより”The Conductus collections of MS Wolfenbüttel 1099”　を１～３巻購入しました。

コンドゥクトゥスという中世音楽のジャンルについて、ここではあまり学ぶことがないかもしれませんが、中世の典礼から発した輝かしい声の典礼芸術と考えてください。グレゴリオ聖歌から発展して、また異なる典礼音楽の局面を形成しています

ここに購入しましたのは 12 世紀の典型的な形で、グレゴリオ聖歌を定旋律としない、定旋律を持たない自由な楽曲であること、テキストも典礼文や聖書からの引用ではなく新しい自由な散文であることが特徴です。単旋律を聴きなれた耳には多声のコンドゥクトゥスは驚くべき対位法による喜びに満ちた華麗な音楽でした。オルガヌム、クラウズラ、モテトゥスなどと同じくモーダルリズムでできています。カウダといわれる華やかな母音唱法、またホケトゥスといわれるスリリングなシンコペーションの交代の効果もあり、創作意欲にあふれた中世芸術の発露です。

この写本の 1 曲目を見てみましょう。Salvatoris hodie という新年（1 月 1 日、割礼の日）に歌われるコンドゥクトゥスです。ミサ中で、福音朗読の前に歌われました。テキストは「この日、救い主の血が前もって流された、シオンの娘の衣服は白く洗われる」と救済史を自由な言葉で歌います。既存の典礼テキストからもグレゴリオ聖歌からも解き放たれた表現です。「無名の音楽理論家４」（Anonymus IV）によりますとこれはノートルダム楽派のペロタンに作者が帰されています。

## J.B.Hilber: Messe zu ehren des Hl.Franz von Assisi

これは橋本先生の遺品の中にあった楽譜です。資料室の収集活動の中では決して拾えなかった貴重な楽譜と思います。1977 年 4 月 10 日、ケルンで購入、とメモがありますので先生の留学時代の終わりころでしょうか？　タイトルのごとくアッシジの聖フランシスコのためのミサ曲です。Hilber については詳しくはわかりません。1891-1973 年に生きたルツェルンで活動した教会音楽家ということがおぼろげにわかる程度です。しかしフランシスコの大聖年にあたる今年、これをご紹介するのは意義あることと思います。混声合唱とオルガンの編成のミサ曲でアマチュアであっても無理なく演奏できるスタイルです。序文に「この短く簡素なミサ曲は主日の荘厳ミサや祝日に仕事として演奏する有名な合唱団ではなく、もっと簡素に日々の奉仕の聖歌隊によって歌われるのが好ましい、独唱はなくあくまでも合唱である。このミサ曲は「太陽の賛歌」を作り、熱心な神のトルバドゥールであったフランシスコに捧げられる。彼と共に神をたたえるために。したがって熱烈な祈りと神への賛美と感謝と共にアッシジの貧者の精神で演奏されるべきである。」とあります。

杉本ゆり　記